

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈受賞紹介〉

父称Mac-/Mc-で始まる姓の借用語における促音化：
つづり字と音節構造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大滝, 靖司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000733

日本言語学会では、研究大会における若手会員の口頭発表・ポスター発表の中から特に優れた発表に対して「日本言語学会大会発表賞」を授与しています。大滝氏の発表は、借用語における促音化に対し独創的な視点から調査を行うことにより、その生起要因を明らかにした研究であり、内容および発表の仕方や質疑応答が優れていると評価され、第144回大会の大会発表賞を受賞しました。

受賞対象 大滝靖司「父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造」
(日本言語学会第144回大会(2012年春季, 東京外国語大学)における発表)

父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造

大滝 靖司

ここでは、日本言語学会第144回大会(2012年6月, 東京外国語大学)で口頭発表した上記の論文を紹介する。この論文は、借用語における促音化のうち「語中の促音化」と呼ばれる現象がどのような要因で起こるかを明らかにするために、Mac-/Mc- で始まる姓の借用語のデータを分析し、その結果を報告したものである。

英語から日本語に入った借用語には、原語(借用元の単語)が「短母音+阻害音」という音連続を持つ場合に「ッ」が入りやすいと指摘されてきた(大江1967など)。興味深いのは、原語の発音には促音に対応する音がないにもかかわらず、借用語として日本語に入る際に「ッ」が加えられることである。借用語の促音化には、原語の語末子音に起こる「語末の促音化」(1)と、原語の語中子音に起こる「語中の促音化」(2)がある(川越・荒井2002など)。

(1) 語末の促音化：top トップ, cut カッット, kick キック

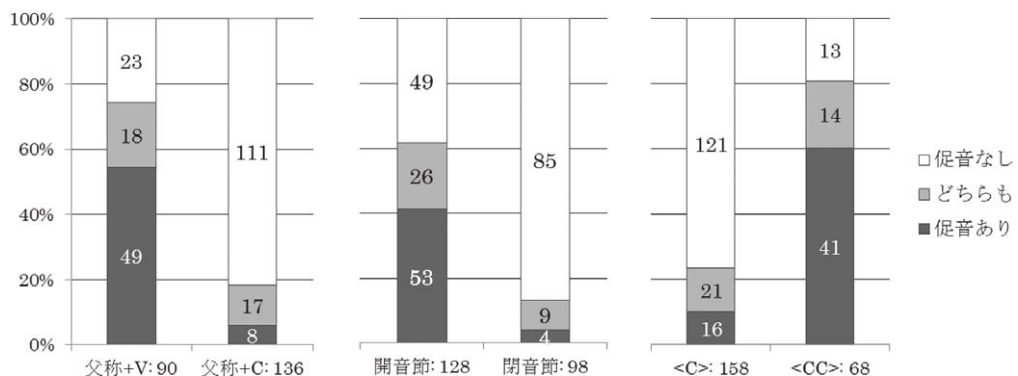
(2) 語中の促音化：happy ハッッピー, battery バッテリー, lucky ラッッキー

このうち、語中の促音化は規則性を見出すのが容易ではなく、その生起要因を特定するのは難しい。先行研究では、原語において先行母音に強勢があること(Lovins 1975など)やそれに伴う音節構造(Katayama 1998など)、重子音つづり字<pp, tt, ck, ...>(小林2005など)が挙げられている。しかし、語中の促音化を起こす原語の多くは「先行母音の強勢」と「重子音つづり字」を兼ね備えているため、これらの要因のどれが大きく働いているのかはつきり見えてこない。

そこで、本研究は、語中の促音化の要因を明らかにするために、父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語を研究対象とした。父称とは「～の子」を意味する姓(亀井ほか(編)1995:1145)を指し、英語には Mac-/Mc- の他に -s, -son, O', Fitz- などの形式がある。Mac-/Mc- を持つ語を対象としたのは、これらは多くの場合、Mac-/Mc- の後続母音に強勢がある(例：

McDonald マクドナルド, McCarty マッカートニー) ため, 先行母音の強勢という要素を排除し, 語中の促音化の純粹なつづり字や音節構造, 後続要素の影響を調べることができるからである。

借用語データの収集には CASIO EX-word DATAPLUS 4 XD-GF 10000 に収録されている辞書と三省堂 Web Dictionary の辞書コンテンツを計 26 種類用いた。最終的に, 父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語を計 226 語収集したデータを作成した。そして, 原語における父称の後部要素 (母音 V/子音 C), 父称部分の音節構造 (開音節/閉音節) および父称の最終子音 /k/ のつづり字 (単子音 <C>/重子音 <CC>) によってデータを分類し, それぞれの促音化率を算出した。



分析の結果, 語中の促音化は, ①子音が後続するよりも母音間子音が後続する場合の方が促音化しやすく (例: McDonald マクドナルド vs. MacArthur マッカーサー), ②閉音節構造の場合に大きく促音化率が下がり (例: McDonald マクドナルド), ③単子音つづり字よりも重子音つづり字の方が促音化率が高い (例: McDonald マクドナルド vs. McCartney マッカートニー) ことが明らかとなった (上図参照)。母音間の方が促音化しやすいことは先行研究でも指摘されてきたが, 先行母音に強勢がない子音でも母音間という環境が促音化率に大きな役割を果たすことは今回初めて実証された。また, 父称部分が閉音節構造の場合に促音化率が大きく下がることから, 「語末の促音化」を引き起こすとされる原語の閉音節構造は, 「語中の促音化」の誘因となるわけでは必ずしもないことが示唆される。さらに, 父称の最終子音 /k/ のつづり字が重子音つづり字の方が促音化しやすいことは, 原語の文字情報の影響が無視できないレベルにあることを示している。

●参考文献●

- 亀井孝・千野栄一・河野六郎 (編) (1995) 『言語学大辞典 第6版 術語編』東京:三省堂。
 Katayama, Motoko (1998) *Optimality Theory and Japanese loanword phonology*. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
 川越いつえ・荒井雅子 (2002) 「借用語における促音」『音声研究』6(1): 53-66。

小林泰秀(2005)『日英外来語の発音』広島：溪水社.

Lovins, Julie B. (1975) *Loanwords and the phonological structure of Japanese*. Bloomington: Indiana University Linguistic Club.

大江三郎(1967)「外来語中の促音に関する一考察」『音声の研究』13: 111-121.

大滝 靖司 (おおたき・やすし)

中央大学高等学校英語科専任教員。国立国語研究所共同研究員。修士(言語学)(東京外国語大学)。国立国語研究所プロジェクト奨励研究員(2011年4月～2013年3月)を経て、2013年4月より現職。

主な著書・論文:「借用語における母音挿入の音韻論的解釈—共時的および通時的観点から—」(『音韻研究』15, 2012),「借用語に現れる重子音の通言語的研究」(『コーパスに基づく言語学教育研究拠点研究報告集8 コーパスを用いた言語研究の可能性IV』, 2012).